

批判的実在論と社会的創発性

福士正博

I 構造－エイジエンシー論争：社会的創発性の役割

社会科学の歴史をたどると、分析が遅れているのではないかという疑問を持たざるをえない概念がいくつかある。社会的創発性 (social emergence) もそのうちのひとつである。「社会とは何か」、「社会の安定と変化はどのような要因によるものなのか」、「自然科学と社会科学はどこに方法論的違いがあるのか」など、社会科学を学ぶ者なら必ずといってよいほど抱く疑問に的確に答える概念がないという苛立ちを感じるのは私だけなのだろうか。社会的創発性は、これらの問いに答える基礎的概念の中でも、最も重要かつ深みのある概念のひとつである。それだけに、これらの問いと同時に、それに答える可能性を持つ創発性と、それを社会に適用した社会的創発性を避けて通ることはどうしてもできなくなる。社会的創発性はそれだけの重みをもっている。

批判的実在論の創始者ロイ・バスカーは、『自然主義の可能性』(1979, 邦訳 2006) の中で、「社会が人間にとって認識可能な対象であるためには社会はどのような特性をもたねばならないのであろうか」という問いを立てている。この問いは、「どのような特性を持つことで社会は認識可能となるのか」について回答を求めており、「社会科学が科学として成立するために、どのような基礎的概念が求められているだろうか」という問いに置き換えることができる。問われているのは、社会を研究対象とする社会科学独自の存立基盤である。バスカーがこうした問いを立てた背景にあるのは、社会科学が科学ならしめる基礎的概念を発見できず、その本格的検討を怠ってきたために、深刻な歪みを生じさせてしまっている危機意識である。社会科学は、科学であるための必要条件を素通りし、そのために自然科学の方法に吸収され、独自の成立基盤を失いかねない状況に陥っていた。「社会存在論を自然化する」という動きもそのひとつである。開放系であり、様々な偶有性に左右されがちな社会をそれ自体として分析するには、自然科学と異なる社会科学独自の方法が必要となる。求められているのは、そのために必要な基礎的概念を確立することである。その概念に、この問いに応えるだけの深さがなければ、社会科学はその展望を失いかねない。バスカーがこの問いに応える基礎概念のひとつと考えていたのが社会的創発性であった。

19世紀中葉に活発に議論されて以降、創発性はおおよそ150年の歴史を持っている。しかし、創発性を社会に適用するとなると、その歴史は極端に新しくなる。この概念の本格的

批判的実在論と社会的創発性

検討が始まったのは20世紀後半であるから、せいぜいその歴史は長く見積もっても半世紀ほどしかなく、この間にこの概念の持つ意味が深く掘り下げられてきたというわけにはいかない状況にある。

本稿の目的は、こうした関心を背景に、批判的実在論（critical realism）の立場から、この概念の意義を明らかにすることにある。創発性が弱い創発性、強い創発性に分かれた多義的概念であるように、社会的創発性も多義的である。批判的実在論の立場から社会的創発性の意義を明らかにしようとしていることは、多義的な社会的創発性のうち、批判的実在論という限定された立場から他の立場の問題点の指摘と批判を行い、その意義を浮き彫りにすることを意味している。創発性を一般的に定義するならば、おおよそ次のようになる。

「生物進化の過程やシステムの発展過程において、先行する条件からは予測や説明のできない新しい特性や能力が生み出されること」（『広辞苑』（第7版））

この説明を読むかぎり、創発性とは、演繹や帰納といった伝統的な方法では説明することが難しい、予測不可能な事象が生物進化やシステム変化の過程で出現する現象と、それを分析する科学的概念ということになる。『社会構造の因果力』（2010）を書いた批判的実在論者のひとりデイブ・エルダーバスは、「創発性概念の価値は、実在がどのようにそれ自体で世界に因果的影響を及ぼすのかを説明することのできる潜勢力にある。すなわち、諸部分がこうした全体に組織化されていなければ持っていたはずの影響を総計しただけですますことのできない因果的影響といった潜勢力である」（Elder-Vass 2010, 5）と述べている。創発性を社会に適用する場合でも、社会がある法則にしたがって必然的に変化するのではなく、様々な要因が絡み合う偶然性（偶有性）をともなう複雑な過程を含んでいる以上、予測不可能性や説明不可能性をその内に組み込んだ基礎的概念が必要となる。この概念を社会理論に取り入れることは、複雑系としての社会を解剖する上で避けて通ることができない。それにもかかわらず、社会科学はこれまで、この概念の重要性を認めず、社会分析のツールとして用いることも少なかった。この状況を開拓するには、なぜそのような状況が生まれたのかを追求することもさることながら、多義的なこの概念の意味を明らかにし、批判的実在論という解釈をなぜ選ぶのかという立脚点を確定することが何よりも大事となる。そこで、あらかじめ、この問題に取り組むにあたって、何を切り口に論じようとしているのかについて述べておくこととする。

本稿が社会的創発性に関心を抱くのは、いまだ決着がついていない構造-エイジエンシーリン争にこの概念が何らかの形で貢献できるのではないかという期待があるからである。エルダーバスが先の書物を著わしたとき、「本書は、構造やエイジエンシーリンの問題に対する解決策を、創発性概念を用いることで見つけようとしている。この概念にしたがうならば、し

ばしば私が「実在」とか、「全体」と言っているところは、諸部分が持っていない特性や潜勢力を持つことができるという考え方を表現したものになる。そうした特性が創発特性と呼ばれているものである」(Elder-Vass 2010, 4)と述べている。ここで指摘されているように、創発性とは実在から生まれる潜勢力である。構造-エイジエンシー論争が本格的に行われるようになったのは、アンソニー・ギデンズに代表される構造化理論 (structuration theory) が登場してからであった。それまでの、構造主義、機能主義、マルクス主義など構造の側から立論される方法論的全体主義 (methodological holism) と、ウェーバー主義、社会現象学、相互作用論、エスノメソドロジーなど行為主体の側から立論される方法論的個人主義 (methodological individualism) がせめぎ合う中で、ギデンズの構造化理論は、両者が相互に作用し合う関係を構造化としてまとめただけに、あらためて「構造とは何か」、「エイジエンシー (行為主体性) とは何か」という問題をつきつけ、それぞれの概念と関係性を再考する契機となっていた。「社会対個人」が「構造対エイジエンシー」の論争に変化するようになったのも、こうした論争課題の変化を背景としていた。この論争が決着しないまま今にいたっているのは、論争に組み込まれている基礎概念に合意がないこともさることながら、論争の枠組みを規定している社会存在論 (social ontology) に搖らぎが生じていたからである。構造-エイジエンシー論争を背景に社会的創発性をとり上げるのも、この搖らぎからである。ここでのねらいは、こうした背景に対する関心をもとに、構造-エイジエンシー論争をあらたな視座から再考することにある。

それでは、構造-エイジエンシー論争を再考しようとする場合、なぜ批判的実在論の視座が必要になるのだろうか。批判的実在論者のひとりマーガレット・アーチャーは、彼女の主著『実在論的社会理論』(1995) の最初の一行を次の文章から始めている。

「社会的実在が他のいかなる実在とも類似していないのは、それが人間によって構成されている、ということによっている」(アーチャー 1995, 1)。

構造-エイジエンシー論争は、批判的実在論から見れば、社会という実在が人間という実在によって構成されているという両者の関係の理解をめぐって行われている。実在に傍点を付しているのは、実体二元論 (substance dualism) や性質二元論 (property dualism) との違いを明確にするためである。したがって、この論争に参加する者は、どのような立場に立つ者であっても、「社会 (構造) とは何か」、「人間はそれにどのように関わるのか」という二つの基本課題にあらためて応えていなければならない。この二つの問い合わせから、構造とエイジエンシーはどのような関係を取り結ぶのかというもうひとつ別の問い合わせが生まれる。構造化理論がとり上げようとしたのもこの課題であった。

構造とエイジエンシーの両方をめぐって論争が行われ、それに決着がついていないのは、

批判的実在論と社会的創発性

上に述べた二つ、或いは三つの問い合わせの理解が錯綜し、着地点を見出すことができずに混乱しているからである。アーチャーもまた、「したがって必然的に、個人と社会との関係という問題が、そもそもはじめから社会学の中心的問題であったわけである。「構造とエイジエンシー〔行為作用〕」の結びつきを理解するという仕事は、常にこのような中心的位置を保持するであろう。なぜなら、それは、社会とは真実になんであるかという問い合わせから生じるものだからである」(アーチャー 1995, 1-2) と述べている。このように、この論争は、「社会とは真実になんであるか」という基本的問い合わせから始まっている。本稿が、批判的実在論の立場から論争を再考するという場合でも、批判的実在論がこの問い合わせに的確に応えられるものとなっているかどうかが問われることになる。

この論争は、ウェーバーに代表される主意主義的立場、デュルケムやパーソンズに代表される機能・構造論的立場、そして、構造化理論に見られる両者を融合しようとするバーガー＝ルックマンやギデンズ、ブルデューに代表される立場など、エイジエンシーの側から見ると、構造の側から見ると、更に、両者をどのように融合するのかというように、それぞれ全く異なる立場から主張されてきた。現時点で振り返れば、この論争は、異なる立場の応酬と反発に終始し、最終到達点を見出すことができないまま、中途半端な形で終わってしまった。こうした状態にあるこの論争に批判的実在論の立場から参加するのは、そのことによって、これまで想定されていなかった新しい着地点を見つけること、すなわち、第4の構造・エイジエンシー論争の道を探る可能性と展望からである。批判的実在論の視座が必要と考える理由はここにある。

II 社会的創発性をめぐる研究状況

ここで、社会的創発性をめぐる研究状況から、本稿の切り口を整理しておくことにしよう。この整理が必要になるのは、批判的実在論の主張の核心にある社会的創発性が、心の哲学で争われた還元的物理主義と非還元的物理主義の論争を受け、それを社会に適用しようとしたキース・ソーヤーをはじめとする非還元的個人主義に対する批判と克服から生まれてきた経緯があるからである。この経緯を考えるならば、その批判がどのような論点を、何にもとづいて、どのように行おうとしていたのかを明らかにすることが、最初に取り組むべき課題となる。

社会的創発性研究は、ソーヤーをはじめとして、心の哲学の成果を社会の領域に活かすことを意識しながら行わってきた。心の哲学では、心的因果の独自性をめぐって、ジエゴオン・キムを代表とする還元的物理主義とそれを批判する非還元的物理主義の間で論争が行われていた。社会科学は、この論争の成果を受け、社会構造やエイジエンシーの独自な因果性の評価という新たな課題をめぐって論争が行われてきた。キムの議論が緻密で、相当の論理

的深みがあるだけに、この論争は心理学の領域と哲学の領域を取り込みながら、最初から学際的性格をもっていた。この論争の両翼のうち、どちらに軍配をあげるべきなのかという判断をここでは行わない。なぜなら、ここでの課題は、この論争をどちらかの立場に立って評価することではなく、何が論争課題となり、どのような枠組みで意見がたたかわされ、社会的創発性を論じるにあたってその成果や未解決な論点をどのように受け継ぐかということにあり、それらを取り上げることの方がはるかに重要だからである。

社会的創発性を問題とすることは、社会構造とエイジエンシーに独自の因果力 (causal power) があることを明らかにすることにほかならない。そのことからすると、心的因果の独自な存在と社会的創発性の存在を明らかにすることは、その間に様々な問題が含まれているとしても、共通の地平に立っているということができる。このように、社会的創発性をめぐる議論は、心の哲学の状況を背景としつつ、非還元的物理主義を社会の領域に横滑りさせたキース・ソーヤーの非還元的個人主義の評価をめぐって行われてきた。批判的実在論の立場から社会的創発性の意義を明らかにするという課題は、非還元的個人主義を批判すると同時に、それとは別の視座から社会的創発性を論じることになる。これまでの経過を、時系列順に、図式的に表わすと、次のようになる。

- (1) 心的因果をめぐる還元的物理主義と非還元的物理主義の対立 ⇒
- (2) 上記 (1) を受けた社会的創発性をめぐるキース・ソーヤーを中心とした非還元的個人主義の提起 ⇒
- (3) 上記 (2) を批判的に継承した、社会的創発性をめぐる批判的実在論の議論 (バスカー, アーチャー, エルダー・バス)

本稿の課題は、(3) の議論を正確に整理することにある。そのためには、上記の経緯を踏まえ、(2) の議論、更に (1) の議論へ遡ることが必要となる。しかし、ここでは、(1), (2) の論点を (3) にあてはめること、すなわち、それまでの論争過程で争われた論点を批判的実在論がどのように受けとめ、新たな社会的創発性概念を築こうとしていたのかが議論の中心となることから、このような遡及方法をとることはやめ、基本的論点を引き出すことに注力して議論を進めていくことにする。

エルダー・バスは、『社会構造の因果力』を執筆した問題関心について次のように述べている。

「人間がそれ自体として因果力を備えた実在であるという議論を受け入れることは相対的にやさしい。しかし、論争課題は、それと類似した力が社会にあるという主張にある。その理由のひとつは、社会構造の議論が力を備えた実在という点で行われていないこと、したが

批判的実在論と社会的創発性

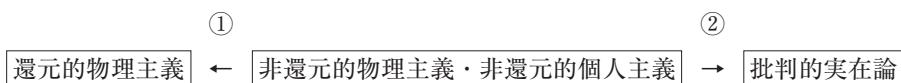
って、実在が何らかの特定の構造的力を持っているということが殆ど間われていないことがある」(Elder-Vass 2010, 6)。

エルダー・バスの目標は、社会構造それ自体に因果力があることを存在論の立場から明らかにすることにある。ソーヤーの研究が、社会構造の因果力を説明するために、個人主義という基盤を通過する間接的説明となっていたのに対して、エルダー・バスの研究は社会構造を直接問題にしようとしていた。

基本的論点を引き出すという点からすると、キムが、「非還元的唯物論の神話」と題する論文の中で、還元的物理主義の立場から、上記（1）～（3）の関係を次のように整理していたことに注意しておきたい。本稿も、キムのこの整理に従っている。ただし、その立場はキムとはまったく逆のところにある。

「非還元的物理主義者が物理的領域の因果的閉包性を受け入れることになれば、彼らは、心理的物理的因果性の可能性を説明する明確な方法をもたないことになる。このことは、反還元主義をあきらめるか、心的因果関係の可能性を否定するかのどちらかである。心的因果の否定には二つの方法がある。第1に、心的事象があることを信ぜず、否定することである。第2に、自らの自律した因果的世界を構成し、物理的過程との因果的取引に入らず、心的事象を信頼することである。したがって、あなたは消去主義を支持するか、心的領域を物理的領域から全体的因果を切り離す二元論の方向へ動くか、のどちらかとなる。この方向を唯物論と考えることはできない。したがって、私の結論はこうでなければならない。非還元的唯物論は安定した立場ではない。あるのは、直接的な消去主義の方向か、明確な二元論の形態の方向に向けた圧力である」(Kim 1993, 284)。

キムは、非還元的物理主義が、還元主義に戻るか、それとはまったく別の二元論の方向を目指すのか、岐路に立っていることを指摘している。非還元的物理主義には、物理主義（唯物論）という一元論的構成をとりながら、同時に、意識も独自に存在することを主張する二元論を抱え込む「無理」を抱えている。非還元的個人主義も、非還元的物理主義の無理をそのまま引きずっている。キムは、この無理を正す方向が二つあることを指摘している。図式的に表わせば、次のようになる。



キムが目指す方向は、言うまでもなく、①の還元的物理主義を徹底することである。それ

に対して、本稿は（したがって批判的実在論は）、還元主義に戻ることはもちろん、非還元的物理主義や非還元的個人主義のように、スーパー・ヴィニエンスや多重実現説を採用することで、心的因果性や社会構造の独自の存在を迂回する形で、間接的に説明しようとする事でもない。目指そうとしているのは、②の二元論という、それとはまったく異なる別の方向である。しかし、二元論といつても、デカルトの心身二元論に見られる実体二元論なのか、実体が持つ機能的性質の二元論なのか、或いは、それとは別の二元論なのかによって、その意味は全く異なってくる。本稿が目指すのは実在二元論（entity dualism）である。

さて、還元的物理主義を徹底しようとするキムに対して、心の哲学においても還元主義が成立しないことをバスカーは指摘している。この指摘は、批判的実在論が何を目指そうとしているかを探る上で示唆的である。以下は、キムが指摘する二つの道のうち、バスカーが還元的物理主義を批判した部分である。

「還元主義の考えは一見もっともらしく思われるが、実際には、間違った見方である。方法論的個人主義に対する批判を通じて、社会が科学的研究の実在論的対象として存立する限り、社会は諸個人の特性には還元されない特性をもたねばならないことが明らかになっている。心の唯物論（注：還元的物理主義）、とりわけその考えを厳密に定式化した「中枢神経系状態」説に対する批判を通じて、人間なるものが物質特性に還元されない特性をもつことを明らかにしてみたい。すなわち、心にまつわる諸々の特性が独特の実在的力を備えており、特に従来の議論では看過されてきた編成原理の動きをともなっている点を明らかにし（てみたい）」（バスカー 2006, 113）。

バスカーの主張は明確である。心的特性は中枢神経という物理的基盤に還元することによってではなく、心が持つ実在的力そのものから説明されなければならない。そのために批判的実在論が果たさなければならないのは、創発特性が実在からどのように生まれるのかという編成原理、すなわち、バスカーが言う「共時的創発力に基づく唯物論」を明らかにすることである。バスカーによれば、「共時的創発説は最終的に二元論的相互作用説に行き着くことになる」（同）。創発性がこのような考え方したがって説明されるものであれば、社会的創発性もまた、この考えにそくして明らかにされなければならない。したがって、批判的実在論が実体一元論の立場に立つ還元的物理主義を批判しようとする場合、実在二元論の基礎をなす共時的創発理論がどのような立論構造になっているのかを確かめてみることが必要になる。とくに、有力な批判的実在論者マーガレット・アーチャーの分析的二元論が通時的創発性を軸に構成されていることを考えるならば、共時的と通時的の関係を整理することが大事な課題となる。

すでに述べたように、批判的実在論の立場から社会的創発性を論じるということは、社会

批判的実在論と社会的創発性

的創発性を社会存在論の一環として論じることにはかならない。還元的物理主義も、非還元的物理主義や非還元的個人主義も、存在論を否定しないまでも、その中身は所謂機能主義にもとづいた議論が展開されているにすぎず、批判的実在論から見ると、その議論はその時点ですでに変質てしまっている。批判的実在論がこれらの議論と決定的に異なるのは、その背景にある存在論に違いが生まれているからである。批判的実在論と非還元的個人主義が同じように社会的創発性を取り上げているといっても、機能特性主義に傾斜する非還元的個人主義と違って、批判的実在論は実在論の立場をとることで社会存在論を徹底しようとしている。批判的実在論にとって最も大事なことは実在論を彫琢することである。ここで注意しておかなければならぬのは、この問いに応えようとするときの批判的実在論の基本姿勢についてである。アーチャーは次のように述べている。

「私の原理的主張は、我々は存在論と方法論と実践的社會理論との三重の結びつきを認識しないでは、そして、それらの間の一貫性を確証しなければ、この理論的な泥沼を抜け出すことはできない」（アーチャー 1995, 7）。

アーチャーはこのように、この論争に、「存在論－方法論－社会的実践理論」の三者を連結する立場から参加することを呼びかけている。論争は、「社会構造とは何か」、「人間はそれにどのように関わるのか」という問い合わせに対する説明から始まっているだけに、そのための方法論が求められていることは言うまでもない。しかし、アーチャーは、その前に、「説明の枠組み〔方法論〕が両端〔存在論と実践的社會理論〕にしっかり繫留されていなければならない」（アーチャー 1995, 8）というように、方法論は存在論と実践理論につながって初めて合理的になることを強調している。社会存在論が問題となるのもこの指摘にしたがったものである。批判的実在論がこれまでの論争のあり方に批判的なのは、どの立場にしても、この連結の認識に揺らぎがあると感じているからである。説明が合理的であっても、存在論が欠けていれば、説明自体に無理が生じるという批判的実在論の立場は、三者の連結を考える場合でも、存在論からまず出発しなければならないという理解に裏づけられている。

ここで言う社会存在論は、ジョン・サールのように、「言語が成立すれば社会も成立する」というような制度的事実だけを指しているのではない。むしろ大事なのは、社会構造や人間の主体性を形成している存在的事実とは何かという問い合わせに応えることである。

もうひとつ注意しなければならぬのは、三者の連結を考える場合でも、それらを単純に横並びにしただけの関係にとどめてはならないことである。三者の関係は、存在論⇒方法論⇒社会的実践理論というように、存在論を基礎に説明が組み立てられ、それが理論に昇華していくという順序の中で考察されなければならない。この点についてアーチャーは、以下の2点を指摘している。

「第1に、このことは、そのような説明的枠組みが適切な社会存在論のなかに首尾一貫して埋め込まれていなければならない、ということを意味する。私はすでに、以下のことを示唆していた。すなわち、社会の研究は社会的実在性についての個人主義的構想と全体論的構想という二つの間違った足場で出発したということ、そして、この間違った足場がいまだにお非常に深刻な論争相手として存続しているかぎり、この両者と袂を分かつことが必要である、と。第2に、形態生成論的アプローチは社会の分析家たちにとって実践的な有用性をもつことを意図している」(アーチャー 1995, 8)。

ここで述べられている第1の部分が存在論⇒方法論に関わっており、第2の部分が方法論⇒社会的実践理論に関わっている。注意しなければならないのは、還元的物理主義も、非還元的物理主義や非還元的個人主義も、それぞれが存在論を主張していることである。したがって、それぞれが主張する存在論を正確に理解し、どのような存在論なのかを吟味することが重要となる。判断の基準は実在(entity)概念の理解にかかっている。

III 実在とは何か (1) —— 差異化、構造化、階層化

このように、批判的実在論の立場から社会的創発性の意義を明らかにしようとする場合、その取り組みの基礎にあるのは実在という概念である。後に述べるように、非還元的物理主義や非還元的個人主義が性質二元論をとっていることを考えると、実在二元論という批判的実在論の立場との違いを明らかにすることが重要となる。

エルダーバスは、この点について、「社会的実在とその力の基礎」(2014)と題する論文の中で次のように述べている。

「本論文は、社会構造が創発的因果的力を備えた社会的実在となることで因果的重要性を持つようになることを論じている。そうした力は、そうした実在の諸部分の特徴的集合と、当該種類の実在において発生する特徴的関係とが相互に作用し合う過程によって生み出される。しかし、こうした議論は、心の哲学において展開された創発性の考え方など、一定の創発性理解を拒否することとつながっている。それは同時に、当該構造が創発性に関する一貫性のある説明と一致しているのかという点からどのような点で重要となっているのかを説明せず、因果的に重要であることだけを言う社会構造の言説形態に疑問を抱かせるものとなっている」(Elder-Vass 2014b, 39)。

エルダーバスがこの論文を書いたのは、引用冒頭にあるように、「社会構造が創発的因果的力を備えた社会的実在となることで因果的重要性を持つようになる」ことを明らかにするた

批判的実在論と社会的創発性

めであった。この指摘で大事なことは、社会構造と因果力との関係は、社会的実在と因果力との関係であること、すなわち、社会構造を社会的実在として位置づけることができるかどうかにかかっていることである。批判的実在論者が論証しようとする社会構造の創発性はこのように、社会構造と社会的実在との関係にある。その上で、彼がここで指摘しているのは、先の研究過程の（1）と（2）を批判的に克服することこそ社会的創発性を論じる場合の必要なことがらとなっていることにある。問題はその根拠である。エルダー・バスがここで指摘しているのは、創発性と社会的実在との関係が最も重要であるにもかかわらず、（1）、（2）とも実在概念を放棄し、その特性とその関係について議論をしてしまう誤りについてである。

批判的実在論の創始者ロイ・バスカーは、存在を自存的（intransitive）存在と意存的（transitive）存在の二つに区分している。自存とは、「人間の認識活動からは完全に独立して存在する対象物を自存的対象と呼ぶ」（バスカー 2009, 12）というように、ことがら、もの、事象など、人びとの認識とは無関係に存在している事實を指している。言うまでもなく、このことは、たんにそこにあるという事實だけを述べたものではない。自存的対象が実在と呼ばれるようになる根拠を明らかにすることが重要となる。

バス・ダナマークらは、「実在の特徴は、それが差異化され、構造化され、階層化されているということ」であると述べている（ダナマーク他 2015, 41）。

- ① 差異化：実在は、経験、現実、実在の領域のうち、実在の領域に属する
- ② 構造化：実在は、内的に関係づけられた構造の中に組み込まれている
- ③ 階層性：実在は、それ自身のメカニズムを持つ階層の中に編成されている

批判的実在論は、実在がもつ三つの特徴をどのように構成し、それを社会的創発性につなげているのだろうか。以下は、エルダー・バスの実在の定義である（多くの実在の定義があるが、本稿の課題に合わせて、ここではエルダー・バスの定義を参照する）。

「実在とは、諸部分同士の関係によって構造化された部分集合からなる、持続性を持つ全体として定義することができる」（Elder-Vass 2010, 16. 斜体は原文）。

この定義には、実在の領域にある差異化を前提に、諸部分の関係集合という構造化と、諸部分と全体の編制という階層性が組み入れられている。この定義は、反事実的条件文、すなわち、「～であったならば、～となっていたはずである」という反事実を提示し、その逆の事實を想定することで、ありえるかもしれない状況を予想する形式をとっている。すなわち、この定義は、「諸部分同士の関係がなかったならば、全体が持続性を持つことはない」とか、「創発特性は個々のどの諸部分も有しておらず、それらの構造化されている諸部分の関係が

ない場合に、諸部分全体によって所有されることがないものである」(Elder-Vass 2010, 17) というように、反事實を提示し、それを反転させることで、実在の特徴を浮き彫りにする過程を通じて行われている。実在を定義するにあたってこうした形式をとるのは、実在が創発性を抱え込んでいるからであり（予測不可能性を抱え込んでいるからであり）、そのために、実在は構成的（compositional）組織化を通じてその特徴が生み出されていると認識されているからである。実在に創発性が組み込まれているという批判的実在論の主張からすれば、反事實的条件を提示することで実在の定義や特徴を浮き彫りにすることは、創発性の定義や特徴にも引き継がれている。

創発性の定義を探る上で決定的に重要になるのは、実在を組織すること、すなわち、諸部分という実在の組織化と、それによって生み出される全体という実在が持つ構成論的な創発特性を浮き彫りにすることである。したがって、諸部分がどのように組織化されているのかによって、創発特性や因果力のあり方も左右されることになる。

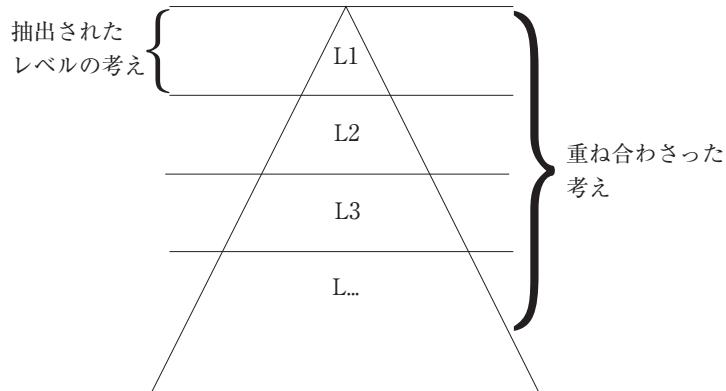
ここで大事なことは、ある諸部分と全体が一塊となって、次の諸部分と全体の塊へと発展していく連鎖メカニズムである。全体が同時に諸部分であるのもこの意味においてである。諸部分と全体の関係はこの連鎖の中で、その位置を更新していくことになる。したがって、両者の関係は共時的であると同時に、通時的でもある。エルダー・バスが心の哲学を想定しながら指摘した以下の説明は、この点について述べたものである、

「心的特性が他の（物理的）特性より高い階層にあると考える理由は一般にない。階層概念は実在を基盤とした存在論の中で意味がある、何故なら、どの所与の実在の中にも構成的階層性というものがあり、直接的諸部分、すなわち自分自身の諸部分より高い階層の諸部分より高い構成階層にある全体について考えることが有益となるからである。しかし、こうした存在論がなければ、特性集合を高次階層と呼ぶことの意味はまったく明らかにならない。実在志向的存在論を前提とした場合、我々は、人間全体の特性である心的特性は、例えば神経の特性より高い階層の特性であると言うことはできるものの、それらは人間全体の他の（物理的）特性より高次階層の特性であるということではない」(Elder-Vass 2014, 43)。

この指摘から、以下の3点を確認することができる。

- ① 諸部分と全体は階層的関係にある。
- ② この階層的関係は何段にも分かれており、したがって、ある諸部分は一段低い階層においては全体を意味し、一段高い階層の全体に対しては部分となっている。
- ③ したがって、各段階の全体はその段階での創発特性を持っており、その意味で非還元的である。

第1図



(出典) Elder-Vass (2010), 50.

例えば、よく引き合いに出される、酸素と水素が結合してあらたに水 (H_2O) が作られるという場合、その定義は、酸素と水素という諸部分が適切に関係づけられた結合形式をとつていなければ、水素や酸素が持っていない、火を消すことができるとか、一定温度で液体化したり、固体化するという特徴を水がもつという、創発現象を内在した形で行われている。水は、全体として構造化されることで持続的な安定性を獲得している。このように、ある実在は通常、諸部分と全体から構成されている存在である。しかし、ある全体は、他の特定事例では諸部分として他の全体を構成する諸部分に転化する。例えば、人間の身体は様々な細胞から組織されているが、水分子は細胞という全体を構成する諸部分のひとつである。このように、ある諸部分とある全体は、原子⇒分子⇒細胞⇒人間の身体というように、低い次元から高い次元へ移行する連鎖の中に組み込まれた一部として存在している。このように、実在は、ある次元では全体でありつつ、別の高い次元では諸部分として機能し、特定の役割をもちながら、次元を変えることで変化している。

エルダーバスは、実在の階層的編制を、「様々な存在論的次元の階層化された諸部分のアンサンブル」(Elder-Vass 2010, 49) と表現している。エルダーバスは、この変化を、第1図にあるように、重ね合わさった (laminated) 内部階層として描いている。この図は、高い階層から低い階層へ L1, L2, L3……というように階層的に重ね合わさった階層編制を描いている。階層的編制という点から見れば、この図は、人間の身体⇒細胞⇒分子⇒原子というように、先ほどの連鎖を逆向きに見たものということができる。しかし、この図は、階層が一段上がるごとに、その下にある階層の諸部分と全体の関係をすべて引き継ぎ、したがって、頂点にある階層では諸部分と全体の創発的関係が包括的に体現されることになる。仮に L1 が人間の身体であるとすれば、心の機能も含め、それを生み出す物理的、化学的、生物学的、心理学的、社会的結合などのすべてがこの階層に収斂されていることになる。

IV 実在とは何か（2）——創発性

そこで、「実在とは何か」という課題を、その定義内容だけでなく、創発性の定義という別の角度からも見てみることにしよう。以下は、『批判的実在論事典』の創発性の定義である。

「(1) 実体、実在、特性、或いはシステム B は、その存在のために、別の実体、実在、特性、或いはシステム A に依存している、(2) 依存性は、A の本質的変化が B の本質的変化を意味するというように、共変化形態を意味している、また、(3) その形態、機能、B の結果は、A に還元されることはできない」(Mervyn (ed.) 2007, 166)。

A と B が依存し合い、共変化しながら、B は A に還元されることはないという創発性の定義から明らかになるのは、批判的実在論が、先に見た還元主義を目指す①の方向ではなく、それとは逆の②の方向を目指そうとする根拠である。しかし、その場合でも、あらかじめ片づけておかなければならぬ問題がある。というのは、実在の構成的性格のために、批判的実在論の創発性の考え方方が二つに分かれ、どちらをとるべきなのか、その判断が求められているからである。このことは、後に述べるように、通時的創発性と共時的創発性の関係とも関わるだけに、創発性に関する批判的実在論の全体像を明らかにするという点でも大事な論点となっている。まず、二つの考え方の共通点と相違点について見てみることにしよう。

- ① 「ある全体 W は一定の創発特性 M を持っている。W は諸部分 $a_1 \dots a_n$ によって構成され、特性 M は、 $a_1 \dots a_n$ が R として適切な関係にないならば、持つことはないだろう。しかし、W は M を持つという点で持つ因果力は R として適切に関係した $a_1 \dots a_n$ の因果力と同じである」(Navarret and Freyer 2024, 171)。
- ② 「ある全体 W は一定の創発特性 M を持っている。W は諸部分 $a_1 \dots a_n$ によって構成され、特性 M は、 $a_1 \dots a_n$ が R として適切な関係にないならば、持つことはないだろう。R がシステム W の違いを形成している以上、W の因果力は $a_1 \dots a_n$ の因果力の点から説明することはできない」(ibid. 2024, 173)。

この二つの文は、C. ナバレッテと T. フライヤーが、批判的実在論者デイブ・エルダーバスとトニー・ローソンの諸論文を参考に、彼らの創発性の要点を整理したものである。①がエルダーバスの、②がローソンの考え方を図式化したものである。

どちらの文も、「全体実在 W は諸部分 $a_1 \dots a_n$ によって構成され、R として適切な関係に組織化されていなければ、創発特性 M をもつことはないだろう」という反事実的条件を提示するところから始まっており、実在に内在した創発特性を叙述している点で共通している。実

批判的実在論と社会的創発性

在の定義を反事実的条件文から導き出すという構成的性格にしたがうならば、創発性の定義もこのような構成的形式をとることになる。創発性が諸部分の構成から生まれるという特徴は、創発特性 M（したがって全体実在 W）が因果力をもつという特徴につながっている。

アンドリュー・セイヤーは、『社会科学の方法 実在論的アプローチ』の中で実在論を構成する要素まとめているが、その中のひとつに、「諸対象は、自然的対象であれ社会的対象であれ、必然的に特殊な因果力を有しており、また、必然的にそれ特殊の振る舞い方と感応性を有している」（セイヤー 2019, 7）というように、因果力を挙げている。批判的実在論にとって、因果性とは、「バラバラな出来事の間の関係（「原因と結果」）に関するものではなく、対象ないし関係の「因果力」、あるいは「傾向」に関するものであり、より一般的に言えばそれらの活動様式または「メカニズム」に関するものである」（同 101）。因果的メカニズムの解明が世界の実在の領域を研究する課題のひとつであるとすれば、この課題の出発点にあるのが、実在がもつ因果力の発見であった。創発性とはこのように、実在的な因果力を指している。その意味で、「特性とは、世界に因果的影響を及ぼすことのできる、ある実在がもついくつかの本質的側面である」（Elder-Vass 2015, 317）。

二つの文に違いが現れるのは、因果力を導き出す説明の仕方について叙述している後半部分である。

前者（①）は、「因果力は R として適切に関係した $a_1 \dots a_n$ の因果力と同じである」というように、実在 W の諸部分と、それらが W に組織化されるときの諸部分間の関係から因果力を説明している。この説明にしたがうならば、創発特性の創出が同時に因果力の創出も意味するようになるのは諸部分が適切に組織化されているからであり、その裏側には、組織化がうまく行われていなければこうした関係も生まれないという反事実的条件が隠されている。隠されたものを表に出し、反事実的条件がうまく機能しているかを検証するには、演繹とか帰納ではなく、アブダクションやリトロダクションという批判的実在論特有の推論方法にかかっている。この説明の特徴はこのように、諸部分を適切に組織化するという前提と、「これが行われていなければ……」という条件にある。エルダーバスの関係論的創発性が弱い創発性と言われるのは、諸部分が適切に組織されてはじめて創発特性が出現するという前提を根拠としている。エルダーバスはこのことから、「W が持つ因果力は、 $a_1 \dots a_n$ の因果力と同じである」というように、諸部分の適切な組織化によって高い次元で創発特性が現われ、同時に因果力を発揮するという、諸部分の最初の記述を更新する「再記述原理」（re-description principle）を主張している。

この説明に対して、証明すべきことがらが前提になっており、循環論法に陥っているのではないかという批判が行われてきた。この批判に対して、エルダーバスをはじめ、批判的実在論者が用意したのが、高い階層の実在が低い階層に及ぼす下向き因果（downward causation）効果であった。

後者（②）は、組織論的アプローチと呼ばれる、批判的実在論者トニー・ローソンの主張をまとめたものである。ここでも、関係論的創発性と同じように、諸部分の組織化の役割が重視されており、その意味で構成的である。しかし、関係論的創発性と異なるのは、「決定的システムの構成要素の組織化がそのシステムが持つ特性に違いをもたらすのであれば、これらの特性は構成要素に還元することができず、その代わり、存在論的にかつ因果的に構成要素とは異なるものと見なされなければならない」と指摘されているように、「Wの因果力を $a_1 \dots a_n$ の因果力の点から説明することはできない」という結論が導き出されていることである。この主張を支えているのは、「創発性は、その存在のためにその構成要素に依存しているものの、それらは、構成要素に非還元的であり、それらに遡及することのできる、それ自身の因果力をもつ」という強い創発性理解である。因果力は高い次元の特性そのものであると理解され、そこに、 $a_1 \dots a_n$ の因果力を高い階層でも継承するエルダーバスの関係論的創発性と大きな違いがある。そのために、因果力は高い階層の創発特性に吸収され、下向き因果を意識する必要がなくなっている。

C. ナバレッテとT. フライヤーは、批判的実在論の立場から、エルダーバスとローソンの実在論や創発性概念を補強するために、文脈的創発性（contextual emergence）という新しい概念を提起している。補強は、彼らの共通項である構成論的創発性の弱点に向けられている。彼らによれば、諸部分が適切に組織化されるという前提は、高い階層で創発特性と因果力が現れるための必要条件にすぎず、それだけで十分なのかと問われれば、そうとは言えない。この弱点を埋めるには、追加条件を必要とする。しかし、その条件は多くの場合偶有的であり、それが実現するかどうかは、実践を取り巻く文脈にかかっている、というのが彼らの主張である。

「文脈的創発性は、あるシステムにおける低階層の特性が高い階層でその特性が現れる必要条件ではあるものの、十分とはなっていない条件を提示するという提案である。具体的な特性が現れる追加条件の提示は高い階層においてである。そのため、高い階層から偶有的条件が基礎的レベルで必要条件に追加されるときに現象が現われ、そのことによって高い階層の現象が現れる必要かつ十分条件の完全な集合が創出されている。こうした高い階層の条件が具体的文脈と呼ばれ、したがって文脈的創発性と名づけられている」（Navarret and Freyer 2024, 175）。

このような理解から彼らが強調するのは、十分条件の偶有性をなくし、文脈を安定させることで、組織化の安定に必要かつ十分な条件を満たすことである。彼らは、文脈的創発性アプローチを次のように整理している。

批判的実在論と社会的創発性

「システム S は t 時点で創発特性 M をもっている。 S は、 R として関係づけられた諸部分 $a_1 \dots a_n$ に必然的に構成されている。 $a_1 \dots a_n$ にはそれぞれ、 $p_1 \dots p_n$ がある。しかし、 S の創発特性 M は S のレベルの条件 $c_1 \dots c_n$ の偶有的集合が必要諸部分 $a_1 \dots a_n$ に追加されるときに得られるだけである」(Navarret and Freyer 2024, 176)。

ここで指摘されているように、大事なことは、安定的に創発特性 M が創発するよう、文脈を見ながら $c_1 \dots c_n$ の条件を追加することである。この条件の追加には、低い階層の特性があらたな特性として高い階層で創発するという、「あらかじめ決められた」道筋を想定しがちな批判的実在論への挑戦が含まれている。諸部分の適切な組織化が自明ではないとすれば、その条件は多元的世界の中にある。エルダー・バスやローソンの構成論的アプローチは、その条件を必要かつ十分に満たしてはじめて成立する。批判的実在論が還元主義を批判する以上、還元対象を特定するという意味でも、組織化の条件について安定した説明が行われていなければならない。

V 実在とは何か (3) —— 実在と機能

創発特性を探る上で更に重要なのは、エルダー・バスが「色の特性とか電子の特性が物質的実在の特性のサブ集合であるのと同様に、心的特性は物質的実在が持つ特性のサブ集合である」(Elder-Vass 2014b, 42) と指摘しているように、創発特性とは実在から派生する内在した性質であることである。その意味は、性質二元論が実体から離れた特性の関係であると違って、両者は一体であることがある。創発特性の根本的基礎はどこまでも実在にある。あくまで実在が先にあり、創発特性はその後にくる。この順序を間違えると、創発性をいくら主張しても、その時点で、それを構成する社会存在論は台無しになってしまう。このことは、社会構造が持つ特性についても同じことが言える。第2図は両者の関係を整理したものである。

第2図 実在と特性の関係



(出典) 筆者作成

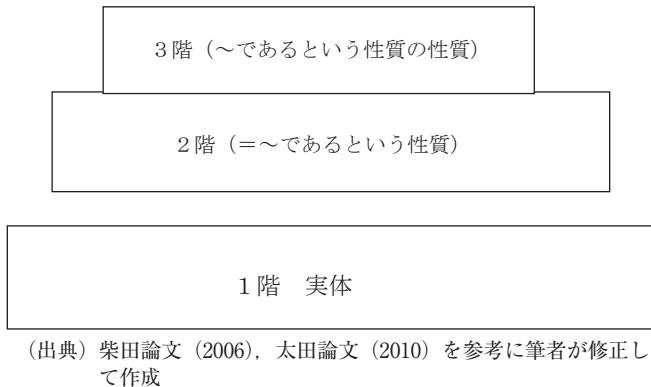
この図に示されている実在とサブ集合の関係は、デカルト的な心身二元論に典型的に見られる実体二元論と根本的に異なっている。実体二元論の実体は文字通り「もの（モノ）」であって、そこには、創発特性をはじめとする様々な関係的性質は含まれていない。実在を実体に置き換えることはできない。実在と創発特性（サブ集合）は本質的に一体のものであり（正確な言い方をすれば、創発特性は実在に内包されている）、実体に読みかえることはできない。実在主義の本質は、実在が創発特性を内在することによって、因果力を持つようになることがある。

ここで重要なのは、実在とそのサブ集合である創発特性との関係を正確に理解することである。批判的実在論も、ソーヤーの非還元的個人主義も、どちらも社会的創発性を主張していることからすると、実在と創発特性との関係は、実在主義をとるのか、機能主義をとるのかの分岐点となるだけに、両者の関係をうまく整理できなければ、社会的創発性をうまくつかまえることもできなくなる。そのことからすると、社会的創発性といっても、実在主義をとる批判的実在論と、機能主義をとる非還元的個人主義とでは、その意味はまったく異なることになる。エルダーバスは、「社会的創発性：関係論的、或いは機能的」（2014）と題する論文の中で、創発性を批判的実在論の立場の関係論的創発性（relational emergence）と、非還元的個人主義の立場の機能論的創発性（functional emergence）に区分している。この区分は、実在二元論と性質二元論に対応している。どちらも創発特性という性質の重要性を強調しているものの、創発特性は実在のサブ集合であり、その基礎に実在があるという批判的実在論と、実在の性質だけを取り出し、性質間の関係性を取り上げることで社会構造の因果力を証明しようとする機能主義とでは大きな違いが出てくる。

両者の違いを探ろうとする場合、その核心は、創発特性を因果力（causal power）として説明できるかどうかにある。この説明をうまくできなければ、創発特性を社会を動かす（変革する）駆動力として評価することもできなくなる。エルダーバスが先の論文でソーヤーの非還元的個人主義を取り上げたのもこの関心からであった。

「およそ100年前、エミール・デュルケムによって開発されて以来、社会構造が創発的である結果、因果的効果を持つようになっているという考えについて論争が行われてきた。この論争に最も興味深い形で近年関わるようになったのは、心の哲学の機能的伝統に依拠したキース・ソーヤーの議論であり、多重実現性や粗野な選言は創発的で因果的影響力のあるものとして社会的特性を見なすという主張が正当であることが論じられている。もしそのことが可能であるなら、創発主義に対するソーヤーの議論に重要な意義があったはずである。そうであれば、それは、社会学において長年行われてきた構造-エイジエンシー論争の解決策となっていたかもしれない。しかも、それは、そのこと以上に、多くの他の学問領域に適用しうる創発性理解を提供することになっていたはずである」（Elder-Vass 2014a, 5. 斜体は原文）。

第3図 実体と性質の構造



エルダー・バスの結論は、多重実現性や選言の役割を強調するソーヤーの考えでは、創発特性から因果力を説明することができないということにある。

創発特性を実在のサブ集合と考えることは、実在からその性質を切り離す性質二元論の無理を指摘することとつながっている。実在主義の意義を正確に理解するには、性質二元論に現れる機能主義や、キムの機能的還元主義に対する批判的評価を欠かすことができない。

機能とは、例えば、一万円札という紙幣がたんなる「紙きれ」であるにもかかわらず、市場で商品と交換される (=実現する) 媒体機能を果たすというように、何らかの実体が、その性質から、世界に働きかける因果的役割をもつことである。心の哲学が心的性質の機能に注目したのは、薔薇の棘が刺さって痛みを感じる心的状態から、脳神経の働きによって棘を抜こうとする行動につながる因果関係を心の機能としてつかまえようとする行動主義を背景としている。機能は行動につながることでその役割を發揮する。性質二元論は、こうした機能主義を、実体が持つ性質間の関係に発展させ、因果力の存在証明につなげようとしていた。

性質二元論は、第3図からもわかるように、実体を1階に、「～である性質」を2階に、「～である性質の性質」を3階に置く階層的編制をとっている。2階と3階は「実現する側」と「実現される側」の関係にあり、性質二元論はこの部分を取り出すことで、両者は実現関係にあるという説明を行っている。ここで大事なことは、1階の実体と、2階・3階の性質とが切り離されていることである。すなわち、2階・3階の性質は実体から離れて独り歩きをしている。非還元的物理主義が性質二元論を主張するのは、還元的物理主義による「因果性の物理的閉包性」という高い壁を乗り越えるために、実体から切り離した上で、3階は2階によって実現される関係にあると読みかえることによって、還元によらなくても、心的因果の独自性を説明できるという認識である。確かに、3階建ての家は2階なしで建てること（実現すること）ができない。3階の性質が2階の性質によって実現されるなら、両者は性質間の関係として説明することができるかもしれないし、そのかぎりで還元主義を非還元主義へ

再編成できるかもしれない。しかし、還元的物理主義の主張は、2階も、3階も、1階という土台があつてはじめて建てることができるという、最終的には物理に還元されるということにある。この主張に反論するには、1階の上に2階・3階が建てられてはいけない。1階と2階・3階が切り離されていれば、それを家と言ふことはできない。このように、還元的物理主義が安定した説明を行つてゐるのに対して、非還元的物理主義の性質二元論は不安定である（不安定というより成立しない）。性質二元論の弱点は、成立しない存在論のために、還元主義を正面から批判できずにいることがある。批判的実在論の強みは、創発特性が常に実在と一体となつてゐることを主張することで、存在論が安定していることがある。

機能主義は常に、実在が持つ特性が果たす役割という点から機能を問題にする。機能主義のこうした見方は、人間の意識、すなわち心的機能は脳神経という物理的機能に基盤を持つ物的一元論の立場に立つ一方、心的機能の独自な存在を主張するために、心的性質と物理的性質というように性質二元論も併せ持つという「離れ業」を特徴としている。キムは、機能主義が抱えるこの矛盾から、たとえ実体の性質から心的因果関係を説明することができたとしても、心的性質は物理的性質によって実現されている以上、還元から逃れることができないという機能的還元を主張している。

非還元的物理主義が心の哲学の中で還元的物理主義を批判するために打ち出した機能主義は、実体が持つ性質を取り出し、性質間の関係を問題にしようとしている。批判的実在論が目指すのは、キムの批判とは違う方向である。批判の要点は、性質とは実在のサブ集合である以上、性質だけを取り出しても、実在間の関係を明らかにすることができないということにある。その観点から、批判的実在論は非還元的物理主義と性質二元論を次のように批判している。

「創発性に関する論争の中で関心を持たれている特性は常に、ある特定の実在が持つ特性、或いは特定タイプの実在が持つ特性というものでしかない、これらの論争にとって問題とされるべきは、それらがどの実在が持つ特性なのかということにある。これらの動きの特徴は、実在を無視することによって曖昧になつてゐることにある。同様に、実在間の関係は、他とは別にある単独の実在が持つ特性とはまったく異なる現象である。あらためて言うと、これがこの論争で問題となつてゐる区別であり、後に見るように、特性に中心的主題を置いたことで曖昧にされてしまった区別である。実在、その特性、それらの関係を区別することができれば、還元主義の問題やその解決策を明らかにすることも難しくなるだろう」（Elder-Vass 2014b, 42）。

非還元的物理主義が性質二元論を基礎に立論され、還元的物理主義がそれに乗る形で還元的機能主義を主張していたという共通点があることを考へるならば、両者の論争は、実在主義を放棄するところから出発してゐることになる。

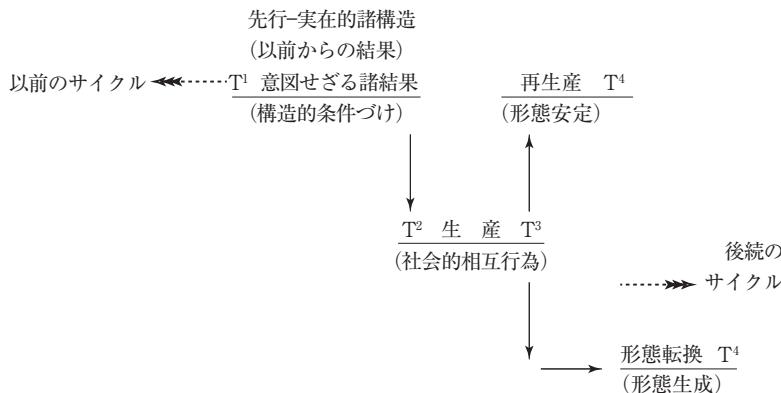
VI 創発特性と因果力

そこで、創発特性と因果力の関係を別の角度からもう一度考えてみることにしよう。これまで批判的実在論の視座から社会的創発性の意義を考えてきたのは、この概念が同時に社会変化を展望することのできる社会的因果力を持つという可能性と期待からであった。当然のことながら、この可能性と期待は現実となることではじめて意味をもつ。社会構造やエイジエンシーがそれぞれ独自の創発特性を持つという前提は、社会の変化を展望する要因をどこに求めるかという関心とつながっているだけに、この前提を説得力のある形で説明することができなければ、その展望も宙に浮いたままとなってしまう。アーチャーが創発性の議論を形態生成論アプローチにつなげたのも、社会的創発性がもつ可能性と期待からであった。ここでは、この問題を、通時的創発性理論と共時的創発性理論をめぐるアーチャーとエルダーバスの応酬を振り返るという視角から見てみることにしたい。この問題は、ソーサーの非還元的個人主義の立論構造を批判する論点と重なっているだけに、両者の応酬を正確に理解することが大事となる。

アーチャーが実在がもつ創発性は同時に因果力でもあるという時、「構造」と「エイジエンシー」は異なる時間の広がりにおいて段階づけられている。この時間的段階づけによって、エイジエンシーに先行して構造が存在することで、実践的な社会理論の定式化が可能になる」（アーチャー 1995, 261）というように、彼女はその論証を、社会理論に時間性を組み込むことで行おうとしていた。この指摘を図示したのが第4図である。

アーチャーの形態生成論アプローチは、構造的条件づけ－社会－文化的相互行為－構造的エラボレーション（形態生成）という時間的に異なる三つの段階の連鎖から形成されている。通時的創発性とは三つの異なる段階を経て現れる実在の特性を指している。すでに見たよう

第4図 「社会的行為の形態転換モデル」と形態生成ノ安定サイクルとの重ね合わせ



（出典）アーチャー 1995, 227.

に、批判的実在論者の中には、創発性を、通時的創発性だけで十分に説明しきれるのだろうか、共時的創発性によって補完する必要があるのではないかという懸念が強く出されていた。共時的創発性とは、構造的条件づけと構造的エラボレーション（形態生成）の間にある社会的相互行為の特性である。それに対して、通時的創発性とは、構造的条件づけがそれまでのサイクルの結果として社会的相互行為に先行し、構造は「先行－実在的諸構造」として、「すでに、そこにある」特性を指している。「創発特性はどこから生まれるのか」とい問い合わせするアーチャーの回答はこのように、「すでに、そこにあるではないか」というものであった。

第4図に示されているように、アーチャーの形態生成アプローチでエイジエンサーが登場してくるのは社会的相互行為の段階においてであるから、社会構造とエイジエンサーの分離が前提となっている。社会構造とエイジエンサーの関係は、両者の分離を前提に、その後で取り結ぶ関係（相互行為）である。先の懸念は、創発特性が因果力をもつという検証を、社会構造が先行するという時間性だけで済ますことはできるのかということにある。共時的創発理論はこの疑問から発せられている。

「「創発性」の通常の使用方法は一般に、いくつか新しい現象の最初の現れ、或いは最初の発展を表わす通時的創発性について述べている。この点は興味深く、共時的概念との関係も考慮されているが、私はこの意味で「創発性」という言葉を使用しようとは思わない。その代わり、私が共時的意味を主題とするのは、ある单一時点における全体と諸部分との特性と力の関係に対する関心からである」(Elder-Vass 2015, 316)。

このような疑問が発せられるのは、アーチャーが、「社会形態の先行実在性がその社会形態の自律性を研究可能な対象として打ち立てる」とか、「社会形態の因果的力がそれらの実在性を打ち立てる」ことを主張していたバスカーの指摘を受け、社会形態の先行実在性と自律性を形態生成アプローチに組み入れているからである（アーチャー 1995, 196-197）。しかし、アーチャーのこの議論は、「社会的相互行為のレヴェルでは、諸集団と諸個人の間に因果的な関係が成立する」（アーチャー 1995, 240）ことが論証されないまま一方的に主張されているだけで、それ以上の説明は行われていない。この説明を行うには、アーチャーが言う三つの段階のうちの社会的相互行為の段階（すなわち共時的段階）を取り出し、そこで実在の創発性と因果力を検証する以外方法はない。エルダー・バスが先の引用で、「ある单一時点における全体と諸部分との特性と力の関係」を問題にしようとしているのも、この点についてである。エルダー・バスは、通時的創発性が形態生成論アプローチに馴染むものではあっても、創発性は本来、共時的に論じられなければならないことを強調していた（Elder-Vass 2010, 16）。

ここで注意しておかなければならないのは、エルダー・バスのこうした問題提起は、通時

批判的実在論と社会的創発性

的創発理論に対する批判を意図しているわけではないことである。エルダー・バスが目指しているのは、共時的創発理論によって通時的創発理論を補完すること、すなわち、通時的と同時に共時的という両面から時間性を追求することにある。バスカーも、かねてから、「私が以下で提唱しようとしているのは、「共時的創発に基づく唯物論」とでも称すべき形而上学的立場である」（バスカー 2009, 113）と述べていた。この点については、社会的創発性を共時的に取り上げる批判的実在論の立論構造を検討する時に、あらためて取り上げることにしよう。

参考文献

- Elder-Vass, Dave (2007), For Emergence: Refining Archer's Account of Social Structure, *Journal for Theory of Social Behaviour*, 54.
- (2010), *The Causal Power of Social Structures Emergence, Structure and Agency*, Cambridge UP.
- (2014a), Social Emergence: relational or functional?, *Balkan Journal of Philosophy*, vol.6, issue 1.
- (2014b), Social Entities and the Basis of Their Powers, Julie Zahle and Finn Collin (ed.), *Rethinking the Individualism-Holism Debate*, Springer.
- (2015), Emergence and the Realist Account of Cause, *Journal of Critical Realism*, 4-2.
- (2019), Realism, values and critique, *Journal of Critical Realism*, 18-3.
- Hertwig Mervyn (ed.) (2007), *dictionary of critical realism*, Routledge.
- Kim, Jaegwon (1993), The myth of nonreductive materialism, *Supervenience and Mind*, Cambridge UP.
- Navarrete, Christian and Freyer, Tom (2024), Redefining emergence: making the case for contextual emergence in critical realism, *Journal for Theory of Social Behaviour*, no. 54.
- Porpora Douglas (2007), On Elder-Vass: Refinining a Refinement, *Journal for Theory of Social Behaviour*, 37-2.
- Sawyer, Keith (2002), Nonreductive Individualism part I-Supervenience and Wild Disjunction, *Philosophy of the Social Science*, 32-4.
- (2002), Nonreductive Individualism part II-Social Causation, *Philosophy of the Social Science*, 33-2.
- (2005), *Social Emergence Societies as Complex Systems*, Cambridge UP.
- アーチャー, マーガレット (2007) 『実在論的社会理論』(佐藤春吉訳), 青木書店
- 太田雅子 (2010), 『心のありか 心身問題の哲学入門』勁草書房
- キム, ジエグオン (2006) 『物理世界のなかの心 心身問題と心的因果』(太田雅子訳), 効果書房
- サール, ジョン (2018) 『Mind』(山本貴光・吉川浩満訳), ちくま学芸文庫
- 同 (2008) 『ディスカバー・マインド 哲学の挑戦』(宮原勇訳), 筑摩書房
- セイヤー, アンドリュー (2019) 『社会科学の方法 存在論的アプローチ』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ出版
- ダナーマーク, パース他 (2015) 『社会を説明する 批判的実在論による社会科学論』(佐藤春吉監

訳), ナカニシヤ書店

柴田正良 (2006) 「機能的性質と心的因果——キム的還元主義を越えて——」『思想』982号

バスカー, ロイ (2006) 『自然主義の可能性——現代社会科学批判』(式部信訳), 晃洋書房

同 (2009) 『科学と实在論 超越論的实在と経験主義批判』(式部信訳), 法政大学出版局

美濃正 (2004) 「心的因果と物理主義」信原幸弘編 『シリーズ心の哲学 I 人間篇』勁草書房